

《講演会報告1》 2004年9月15日

## フランスにおける日本学の現状

—— その起源と発展、今後の展望 ——

ロール・シュワルツ＝アレナレス\*

まず始めに、今年4月の比較日本学研究センターの開設によって、日本学の分野に新たな考察の場と、国際的、学際的な交流の場を設けたお茶の水女子大学の時機を得た率先力に、日本美術史のフランス人専門家として、心より敬意を表したい。このセンターは、世界中の日本学者との知的な交流を今後末永く推進しつつ、またこれまですでに築かれてきた関係を強化し、あるいは改革することを狙いとしており、その目的は真に必要なに応じたものであることを、今日は述べたいと思う。地域独自の、場合によっては研究者独自の方法論と研究内容を考慮し、分析できる能力に基づく、こうした野心的な要求に答えるために、まず最初に、世界で生まれ、そして発展し続けている日本学の現状をここに報告したいと思う。実際、本日のテーマであるフランスの場合、研究の場、組織、研究の起源とその目的を明確にしないことには、実り多い交流活動に取り組んでいくことは困難である。そこで、こうした会とその後に続く活動を準備するために、また、日本の研究者がフランス人同業者の研究内容に、よりスムーズに参加できるように、まずフランスにおける日本学の歴史とその現状を理解するための鍵を、今日は簡単にお話したいと思う。

### 日本学研究の豊かな歴史

多くの方がおそらくご存じだと思うが、フランスは日本学に関して、とりわけ古く、豊かな歴史を自負している国である。その日本学研究の誕生と発展については、今日は深く触れることはできないが、19世紀後期から、その何世紀も前にヨーロッパで生まれた東洋に関する研究の流れを汲んで、フランスは先駆的な主導者たちによって、日本学という分野に乗り出した最初の国の一つであったということ、念頭におきたい。その先駆者として、例えば1863年にパリの帝国東洋言語学校 (Institut Impérial des Langues Orientales) において日本語、日本文学の最初の教育を行い、同時に東洋研究に関わる学会をいくつか開き、活性化させたレオン・ド・ロニー (Léon de Rosny) を始めとして、政府によって数ヶ月間日本へ派遣されたのち、1879年、現在の国立東洋美術館の前身となった壮大な宗教博物館をリヨンに設立したエミール・ギメ (Emile Guimet)、そして1883年に、西洋における日本美術史に関する最初の書物の一つを著したルイ・ゴンズ (Louis Gonse) が挙げられる。

19世紀末、当時流行していたジャポニズムは、初めてヨーロッパに日本美術、日本文化を広め、フランスにおける日本学研究の誕生の引き金となったことは言うまでもない。その時代の政治情勢や文化政策にのっとり、また多くの美術愛好家や蒐集家、科学者、そして最初の万国博覧

\*お茶の水女子大学比較日本学研究センター助教授

会の開催組織によって支えられ、こうした人物達はフランスに日本文化に関する真の知識の道具をもたらすことになる。

しかし、北斎の浮世絵や江戸時代の塗り物は、画家や職人に決定的な影響を与えるが、アカデミックな場では、フランスの知識人たちにとってむしろ、すでに確立していた東洋研究の分野と伝統を引き継ぎ、豊かにしていく機会となるのである。日本学の誕生は、部分的に日本文化の流行に影響を受けたとしてもやはり、数世紀も前から受け継がれてきた東洋研究者や文献学者の、長く豊かな研究の上に成り立つものなのである。

実際、東洋文化研究に関するフランスの最初の先駆者は、かなり昔に遡る。16世紀、フランソワ1世はギョーム・ビュデに勧められ、とりわけ古典と東洋諸言語の教育を目的として、現在のコレージュ・ド・フランスの前身である王立学院 (Collège Royal) の設立を創案する。次の世紀になると、ルイ14世と宰相コルベールは、レヴァントの領土における王国の外向的、商業的影響力を広げる目的で、アラビア語、トルコ語、ペルシャ語といった東洋言語の教育を推奨する。18世紀末、フランスは二つの相互補完的な学校を抱え、東洋研究の中心的な立場に立つ。その一つ、1795年にルイ・ラングレによって設立された東洋現代語専門学校 (l'École spéciale des langues orientales vivantes。現在の東洋言語学校 l'Institut National des Langues et Cultures Orientales の前身) は、何よりも通商外交の推進を目的としていたが、もう一方の王立教授団は、ヘブライ語、カルデア語、シリア語、アラビア語、トルコ語、ペルシャ語、中国語、満州語による文学教育を柱としていた。

19世紀前半はヨーロッパにとって、アジアの様々な国の言語、文学、宗教、哲学、建造物を発見する時期であった。それは、批判的探求の精神が、諸文化に対するより正確な知識へと導

く方法論を獲得した時期でもあった。そしてこの時代はまた、こうした東洋諸国の知識人がヨーロッパ人の科学に開眼し、彼らの研究に協力しに進んで渡欧する時代でもあった。知識の国際交流の精神がこうして生まれる。バタヴィアではオランダ人が、カルカットではイギリス人が主導し、アジアで学会が開かれる。ヨーロッパでも同じような連合機関が必要となり、1822年アジア協会 la Société asiatique の設立によってフランスがその中心となる。この協会には、ペルシャ、アラブ研究者シルベストル・ド・サシー Sylvestre de Sacy (1801-1874) や、中国学者のアベル・レミュザ Abel Rémusat、スタニスラス・ジュリアン Stanislas Julien (1758-1838)、エジプト学者のジャン＝フランソワ・シャンポリオン Jean-François Champollion (1791-1833)、ガストン・マスペロ Gaston Maspero (1840-1916)、あるいはエミール・セナール Émile Sémart (1847-1928)、ガルサン・ド・タッシー Garcin de Tassy (1794-1878)、ウジェーヌ・ビュルヌ Eugène Burnouf (1801-1852) といった錚々たる学者の名が連なっている。

## 現在のフランスにおける日本学の特徴と進展

ジャポニズムの影響を受けた最初の日本学者たちは、先達者の方法と精神を引き継ぎ、何よりもまず比較研究と文献研究の方法に則り自分たちの研究を展開していく。長年にわたり、大切に育まれてきた先達の日本学者たちの遺産は、今日いくつもの独自の歴史と目的を持ったダイナミックな研究・教育拠点によって具現化されている (Antony BOUSSEMARY の講演会を参照：「フランスにおける図書館の現状と今後の日本学の方向」)。ここで、フランスにおける現在の日本学の一般的な状況の特徴を、その内容、方法論、制度的組織から見ていこうと思う。

### a. 制度的組織

フランスにおいて日本学研究は、ほとんどが国立大学や文部省管轄の学校で行われている。現在、この分野では私立の学校は実際存在していない。主要な研究拠点は、大学の学科や大学に直属している研究センターなどに置かれている。また、いくつかの自治機関や国立の美術館も挙げられる。

### b. 内容

最も発展している研究分野は、まず第一に、文献学、思想、宗教、そしてとりわけ優遇されている仏教、また図像学、文学、歴史学、経済学である。また、例えば「禅」、工芸、版画、伝統芸能、庭園美術、風土、建築、デザイン、都市の歴史など、いくつかのテーマが特別な関心と研究を生んでいる。

### c. 方法論

方法論的にみると、世界中どこでも同じ事が言えるが、近年ますます専門化(スペシャリゼーション)へ走る傾向が強くなってきているが、フランスにおいては一般に、日本学の分野では、美術、文学、宗教といった複数の分野を学習し、それらを比較することに重点をおく総合的なアプローチと教育が発展し続けている。また、ある意味で東洋研究の伝統の継承者であるフランスの日本学は、国立東洋博物館やEFEOやCREOPSといった研究機関の活動が示すように、隔離された日本世界ではなく、常に極東、あるいは中近東諸国との関連の中で日本を捉えようとし続けている。こうしたことから、仏教のようにその理解には必ずアジア世界全体を見渡さなければならないような学問の持つ重要性が説明できよう。またこうした現実から、当センターの研究員は、日本学者、中国学者、韓国、インド、あるいは西洋諸国の専門家といった垣根を越え、共通の計画の下に集まり、互いに刺

激を与えていかなければならないであろう。

### 今後の展望

1891年10月8日、フランスにおける日本学の父と呼ばれる1人であるレオン・ド・ロニーは、『時間 Le Temps』誌の記事で以下のように述べている。

東洋学者たちの仕事は、まず比較文献学に始まり、必然的にはほぼ完全に歴史学的なものとなった。そしてそれは近いうちに再び変化を遂げ、文学的で哲学的なものとなるだろう。偉大な東洋学者たちは、もはや単なる通訳者ではあるまい。彼らは思想家となるであろう。

モーリス・クーラン Maurice Courant、ノエル・ペリ Noël Péri、ジョセフ・ドートルメル Joseph Dautremet、あるいはもっと身近な人物としてシャルル・ハーゲナウアー Charles Haguenauer、ルネ・ジフェール René Siefert、ジャン=ジャック・オリガ Jean-Jacques Origas やベルナール・フランク Bernard Frank といった著名な日本学者の功績を見れば、先の引用で予言された「変化」の到来、そしてその重要性を今日の我々は享受していると言えるだろう。民族学、文学、考古学、歴史学といった分野との接触により、革新的な方向性と方法論を備えた文献学的、宗教的研究は、フランスをダイナミックで知的な日本研究の中心地としている。しかし一方で、近代美術や資料研究は数年前から飛躍的な進展を遂げているが、例えば古代美術などの研究はまだ進んでおらず、とくにこの分野に関して教育や国際的な学術交流ネットワークが見事に整っているアメリカと比べると、まだフランスは途上国である。多くの日本人にとって何よりも芸術の国であるフランスは、確

かに江戸時代の小物や浮世絵に大いに心酔したが、平安時の絵画や鎌倉時代の仏像などは、まだほとんど無知である。まだ未開のこうした分野に今日取り組もうとする日本学者たちが、将来的に約束された何らかの具体的成果を出せるようにするために、情報の交換や研究者の移動を容易にすることは、大きな成功要因となることは間違いない。お茶の水女子大学比較日本学研究センターの創設は、こうしたアカデミックな環境の構築に、極めて重要な貢献をすることとなるはずである。

19世紀の終わりから、日本学の研究者たちは常に外国の研究者と密な関係を持ちつつ仕事をしたいと考えてきた。こうした傾向は近年一般化しており、最近政府によって認証された国際共同研究協定のシステムによって、一部簡略化しつつある。フランスと外国の大学の国際交流

を推進するこの協定は、数年前から日仏間でも始動している。もし我々の研究センターが長期的に日仏交流を築いていこうとするならば、そして勿論この二国を結ぶ具体的研究計画を立ち上げるならば、この協定によって法的、事務的手順を省けることは有益なはずである。

また、フランスで数週間に渡って接触を試みた人物や、ギメ美術館、CREOPS、EFEO、そしてINALCOといった研究機関は、比較日本学研究センターの創設を非常に歓迎しており、今後共同で練り上げていくことになるであろう研究計画について、協力態勢を見せてくれた。こうした希望に満ちた具体的な展望の下に、今日の話締めくくりたい。そして今後この第1回目の会が、末長く実り多い定例会となることを願うばかりである。